

第三章「佐橋甚五郎」における破格した武士像

第一節 はじめに

「佐橋甚五郎」は「興津彌五右衛門の遺書」と「阿部一族」に次ぐ鷗外歴史小説の第3作で、大正2年4月『中央公論』の第28巻第5号に掲載された。前2作の改稿・補訂と併せ、同年6月15日に初山書店が発行した第一歴史小説集『意地』に収録された。『意地』の広告文に「佐橋甚五郎」の梗概は、次のように紹介されている。

小山の城の月見の宴、城将甘利四郎三郎の寐首をかいた當年の美少年「左橋甚五郎」は、家康を鼻の先であざ笑ふて、濱松を逐轉して、窃かに朝鮮に往きて、慶長十二年に朝鮮国の使者となつて来朝して、濟ました顔で家康に謁見して歸りたる奇人。意地強きすね者。流石の家康も警戒したる人物。その一代の奇しき運命の物語¹。

このように、「佐橋甚五郎」という作品は、「美少年」「奇人」「意地強きすね者」という性格を持つ主人公佐橋甚五郎を中心として作られた物語である。そして、この作品について、松代周平は次のように述べている。

「阿部一族」に続いて描かれたのは「佐橋甚五郎」だが、これも「興津」・「阿部」と同様、江戸時代の主従関係のあり方が描かれており、「佐橋甚五郎」の場合は、「忠義」という概念に拘束されず、「ふん」という鼻息とともに、主君家康のもとを立ち去る甚五郎の奔放な生き方を通して、「忠義」が殉死という制度によって固定化された「阿部一族」の世界を相対化して見せてくれている²。

引用によれば、佐橋甚五郎は「『忠義』という概念に拘束されず」、主君の側で逃亡した武士であることが分かった。なぜ甚五郎は逃亡し、26年後に朝鮮の使者となり、徳川家康の目前に現れるのか。それに、徳川は甚五郎との面会が終わった後に、なぜ接待したくなったのか。徳川家康

¹ 森林太郎（1975）『鷗外全集』第38巻 岩波書店 P.268

² 松代周平（1995）「鷗外『阿部一族』その事実志向の必然性について」『函館国語』第11巻 北海道教育大学函館国語会 P.57

と佐橋甚五郎の君臣関係に潜んでいる武士の感情は何であろうか、と興味を深く感じた。

それで、本論文は、佐橋甚五郎と家康の人物像を中心に、君臣関係における支配関係を中心に考察する。この考察の結果を通して、「佐橋甚五郎」における武士像を明らかにする一方、君臣関係に隠された武士の感情を究明する。



第二節 道徳基準がかわる徳川家康

2.1 甚五郎の殺人事件に対する見方

甚五郎は蜂谷を殺した後、さほど離れていない田舎に隠れていた。そして、兄源大夫は甚五郎を助けるために、家康に助命の願いを申し出たのである。家康は、甚五郎の兄源太夫が叙述した事件経緯を聞いて、次のように返事をした。

家康はこれを聞いて、暫く考えて云つた。「そちが話を聞けば、甚五郎の申分や所行も一應道理らしく聞えるが、所詮は間違うておるぞよ。併しそちも云ふ通り、弱年の者ぢやから、何か一廉の奉公をいたしたら、それをしほに助命いたして遣はさう。」(P.514)

このように、「一應道理らしく聞える」という返事の内容から見れば、家康は甚五郎の殺人行為に対して、完全的に同意しているわけではないと思われる。なぜならば、山崎国紀は次のように説明している。

戦国時代の一方の権力者として秩序維持に腐心し、これを堅持していく立場にある家康。当然、武士の大義名分を第一義的に認めていかなければならない家康からみれば、甚五郎の行為は、むしろ積極的に認めていかなければならないものであろう。「一應道理らしく聞えるが」には、家康の本音はない³。

引用のように、山崎国紀は家康が「戦国時代の一方の権力者として秩序維持に腐心」するために、甚五郎の殺人行為を認めなければならないと論じた。しかも、これは「家康の本音はない」と述べているのである。山崎国紀の論述である「家康の本音はない」ということに賛成するが、家康が心から認めない理由は、甚五郎が蜂谷を殺したことは役に立たないことだからである。そして、「所詮は間違うておるぞよ」(P.514)という言葉遣いから見れば、責めているような意味が見られる。従って、家康は条件交換という方法で、甚五郎を助命するのである。条件交換の内容については、下記の通りである。

³山崎国紀 (1989)『森鷗外—基層の論究』八木書店 P.271

「はつ」と云つて源太夫は姑く疊に顔を押し當ててゐた。稍あつて涙ぐんだ目を擧げて家康を見て、「甚五郎奴にいたさせます御奉公は」と問うた。

「甚五郎は伶俐な若者で、武藝にも長けてゐるさうな。手に合ふなら、甘利を討せい。」かう言い放つた儘、家康は座を起つた。(P.515)

このように、家康は甚五郎の才能を借りて、敵対者の甘利を暗殺することを助命条件として、源大夫の請求を受け入れたのである。家康は甚五郎の所為に影響され、心中に潜んだ個人の感情を引き起こし、甚五郎の弱みを利用し、敵対者の甘利を暗殺するのである。権力者の家康は「伶俐な」甚五郎が暗殺者にふさわしいことを冷徹に見抜き、今回の殺人事件をかりて、権力を利用し、個人の私欲を満たすことにした。

2.2 家康と甚五郎の関係

甚五郎が家康の命令を実行し、家康のところに帰ってきた後、家康は甚五郎に対する態度はどうであつたか。次の引用を見てみれば分かる。

家康は約束通り甚五郎を召し出したが、目見えの時一言も甘利の事を言はなんだ。蜂谷の一族は甚五郎の歸參を快くは思はぬが、大殿の思召を彼此云ふことは出来なかつた。(P.517)

以上の文のように、家康は甚五郎が甘利を暗殺したことに關して触れることはなかつた。要するに、家康はこれが利益交換であり、自分の目的を達成できた故に、二人の関係が契約で築いた君臣関係という形しか残さないのである。そして、家康は甚五郎を召し抱えた後、甚五郎の奉公態度にどんな態度で対処したのか。次の引用文を見てみよう。

家康が武田の舊臣を身方に招き寄せてゐる最中に、小田原の北條新九郎氏直が甲斐の一揆をかたらつて攻めて來た。家康は古府まで出張つて、八千足らずの勢を以て北條の五萬の兵と對陣した。此時佐橋甚五郎は若武者仲間の水野藤十郎勝成と一しよに若御子で働いて手を負つた。年の暮に軍功のあつた侍に加増があつて、甚五郎も其數には漏れなんだが、藤十郎と甚五郎との二人には賞美の詞が無かつた。(P.517)

以上の文のように、甚五郎は軍功が立つた事で、知行も増加されたの

である。だが、甚五郎は家康からのご賞美の言葉はなかったのである。この冷たい君臣関係から見れば、家康は甚五郎のことを排斥するような態度も見られる。なぜなら、家康は次のようにのべている。

「誰か心の利いた若い者を連れてまゐれ」と家康が云ふ。

「さやうなら佐橋でも」と石川が云ふ。

良久しい間家康の聲が聞えない。甚五郎はどうした事かと思つてみると、やつと家康の聲がする。「あれは手放しては使ひたう無い。此頃身方に附いた甲州方の者に聞けば、甘利はあれを我子のやうに可哀がつてをつたげな。それにむごい奴が寝首を掻きをつた。」

(PP.517-8)

以上の文によれば、この時家康は主君の立場で、甚五郎の所為を批判したように振舞ったのである。そして、家康は甚五郎の所為に対する批判に、「あれは手放しては使ひたう無い」と「むごい奴」という二つの言葉遣いは、軽蔑な意味が見られる。甚五郎が甘利を殺したのは、家康の命令である。戦国時代において、殺人の手段より、主命を果たせる方が大切なものではないか、なぜ家康は甚五郎のことを批判するか。これは主君としての家康は、主君に対する忠誠心は武士の当然の義務を意識し、甚五郎は甘利に接近して甘利の臣下になり、甘利の信頼を取った次第、甘利を殺した行為は、同じ主君としての立場から見ると納得するわけがないのである。つまり、主君としての家康にとって、甚五郎が主君に接近して寵愛をもらった上で、主君を殺す手段のはあり得ないことである。よって、家康は戦国時代においても、武士にとって主君に忠誠心があることは大切なものだ意識した主君である。

2.3 甚五郎の帰来

甚五郎は家康と石川の対話を聞いた後、家康のもとから逃げ去ったのである。それは、甚五郎は23歳で、家康は42歳のことであった。24年経った後、甚五郎は朝鮮の使者となり、家康の目の前に現れたのである。家康は甚五郎と再会した際、どのような反応があったのか次の文をしてみる。

家康は六人の朝鮮人の後影を見送つて、すぐに左右を顧みて云つた。

「あの縁にゐた三人目の男を見知つたものは無いか。」

側には本多正純を始として、十餘人の近臣がゐた。案内して來た宗もまだ残つてゐた。併し意味ありげな大御所の詞を聞いて、皆暫く詞を出さずにゐた。稍あつて宗が危ぶみながら口を開いた。

「三人目は喬僉知と申しまするもので。」

家康は宗を冷かに一目見た切りで、目を轉じて一座を見渡した。

「誰も覺えてはをらぬか。わしは六十六になるが、まだめつたに目くらがしは食はぬ。あれは天正十一年に濱松を逐電した時二十三歳であつたから、今年は四十七になつてをる。太い奴、好うも朝鮮人になりすましをつた。あれは佐橋甚五郎者ぢやぞ。」(PP.510-511)

以上の文のように、家康は慌てた様子が見られる。甚五郎は逃亡したときから、もう24年経つたが、家康は甚五郎のことを依然として覚えてゐる。そして、家康は喬僉知という使者と会見した後、直ちにこの使者は甚五郎であることを断言した。

一座は互に目を合はせたが、今度は暫くの間誰一人詞を出すものがなかつた。本多は何か問ひたげに大御所の氣色を伺つてゐた。

家康は本多を顧みて、「もう好い。振舞の事を頼むぞ」と云つた。これは家康がこの府中の城に住むことに極めて沙汰をしたのが今年の正月二十五日で、城はまだ普請中であるので、朝鮮の使の饗應を本多が邸ですることに言い附けて置いたからである。

「一應取り糺して見ることにいたしませか」と、本多は矢張氣色を伺ひながら云つた。

「いや。それは知らぬと云ふぢやらう。上役のものは全く知らぬかも知れぬ。兎に角あの者共は早くここを立たせるが好い。土地のものと文通などを致させぬやうにせい。」

「はつ」と云つて、本多は忙がしげに退出した。(P. 511)

このように、家康は甚五郎に対する警戒心があると見られる。これは、家康は甚五郎が自分の所為に対して復讐を企てる恐れと不安を抱いていたので、ある程度距離を保つという対応をしたのである。つまり、家康は自分の生命を守るために、朝鮮の使者に対する招待を中止することにした。

以上の家康の主君像を考察したことで、家康は敵対者の甘利を殺すた

めに、甚五郎に助命することを条件として暗殺を支配した。そして、家康は甚五郎が甘利の信頼を貰ったことを利用し、甘利を殺す手段を知ってから、甚五郎のことが信頼できなくなった。警戒心も持つようになった。家康は私欲で、臣下を支配する行為から見れば、狡猾な性格を持つ主君であることがいえる。そして、甚五郎の殺人手段を知ってから、冷淡な態度で対応するようになったことを見れば、家康は臣下の忠誠心を大切にする主君だといえる。要するに、家康は甚五郎に対する信頼感がなく、警戒心を抱き、高い道德基準をもって臣下に評価を与える主君である。戦国時代において、家康は武士の忠誠心を重視する主君であるといえよう。



第三節 表裏のある佐橋甚五郎

佐橋甚五郎はどのような人物なのか。次の文を見してみる。

この岡崎殿が十八歳ばかりの時、主人より年の二つ程若い小姓に佐橋甚五郎と云うものがあつた。口に出して言い附けられぬうちに、何の用事でも果すやうな、敏捷な若者で、武藝は同じ年頃の同輩に、傍へ寄り附く者も無い程であつた。それに遊藝が巧者で、殊に笛を上手に吹いた。(中略) 平生何事か言い出すと跡へ引かぬ甚五郎は、とうとう蜂谷の大小を取つて、自分の大小を代りに残して立ち退みたと云ふのである。(中略)「甚五郎は伶俐な若者で、武藝にも長けてゐるさうな。手に合ふなら、甘利を討せい。」かう言い放つた儘、家康は座を起つた。(PP.512-515)

以上の文によると、甚五郎は岡崎殿(徳川信康)の小姓であり、「伶俐」(P.515)かつ「敏捷」(P.512)で、「平生何事か言い出すと跡へ引かぬ」(P.514)という性格を持つ若者である。それに、「武藝」(P.512)と「遊藝」(P.512)にも優れた武士として描写されている。つまり、才色兼備の武士だといえよう。

3.1 同僚蜂谷を殺すこと

ある日、「信康は物詣に往つた帰りに、城下のはづれを通つた」(P.512)途中、沼にいる鷺を見つけ、同僚蜂谷とこの鷺を撃ち取れるかどうかの賭けをしたのである。その賭けをした過程は、次のようである。

甚五郎は最初黙つて聞いてゐたが、皆が撃てぬと云ひ切つた跡で、獨語のやうに「なに撃てぬにも限らぬ」とつぶやいた。それを蜂谷と云ふ小姓が聞き咎めて、「おぬし一人がさう思ふなら、撃つて見るが好い」と云つた。「随分撃つて見ても好いが、何か賭けるか」と甚五郎が云ふと、蜂谷が「今ここに持つてゐる物をなんでも賭けう」と云つた。「好し、そんなら撃つて見る」と云つて、甚五郎は信康の前に出て許を請うた。信康は興ある事と思つて、足輕にもたせてゐた鐵砲を取り寄せて甚五郎に渡した。(PP.512-513)

以上の引用文によると、蜂谷は「今ここに持つてゐる物をなんでも賭

けう」(P.513)と甚五郎に言ったのである。武士にとって、約束を守ることが大切なのである。そのため、甚五郎が勝ったら、蜂谷は約束を守るのが当然である。しかし、甚五郎が勝った後、蜂谷にほしい物を渡してもらう際に、蜂谷は、「この金熨斗附の大小は蜂谷家で由緒のある品だから遣らぬ」(P.514)といい訳で断ったのである。蜂谷のいい訳を聞いた甚五郎の反応は、次の通りである。

甚五郎は聴かなんだ。「武士は誓言をしたからは、一命をも棄てる。よしや由緒があらうとも、おぬしの身に着けてある物の中で、わしが望むのは大小ばかりじゃ、是非くれい」と云った。「いや、さうはならぬ。命ならいかにも棄てよう。家の重寶は命にも換へられぬ」と蜂谷は云った。「誓言を反古にする犬侍奴」と甚五郎が罵ると、蜂谷は怒って刀を抜かうとした。甚五郎は當身を食せた。それ切り蜂谷は息を吹き返さなかつた (P.514)

このように、甚五郎は武士として、誓言と命は等しいものだと蜂谷に主張したのである。しかし、蜂谷は「いや、さうはならぬ。命ならいかにも棄てよう。家の重寶は命にも換へられぬ」(P.514)と再び家宝は命よりも大切なものだと宣告したのである。武士の信条と家宝の守ることをめぐる争論は、結果が出ないうちに、甚五郎は「誓言を反古にする犬侍奴」(P.514)と罵し、蜂谷が甚五郎を殺すことのように刀を抜こうとしたのである。しかし、「甚五郎は當身を食せた」(P.514)という防衛行為で、蜂谷を殺したのである。武士の信条として誓言を守ることが堅持した甚五郎は、世間の人情は配慮しない武士だと見られる。だが、武士であっても、勝手に人を殺すことは許されるものではない。それで、甚五郎は自分の大小を手に入れ欲しかった蜂谷の大小と取り替え、遠くない田舎に隠れることにした。

3.2 甘利を暗殺すること

甚五郎の兄源大夫は、甚五郎が隠れていたことを知った上で、家康に助命の要請を申し出たのである。甚五郎が蜂谷を殺した経緯を聞いた家康は「一應道理らしく聞えるが、所詮は間違うておるぞよ」(P.514)と甚五郎の所為があり得ないことを判断したのである。そして、「併しそちも云ふ通り、弱年の者ぢやから、何か一廉の奉公をいたしたら、それをしほに助命いたして遣はさう」(P.514)と助命の理由を述べ、「甚五郎は

伶俐な若者で、武藝にも長けてあるさうな。手に合ふなら、甘利を討せい」(P.515)と甚五郎を助命する条件を源大夫に言ったのである。甚五郎は選択する余地がないので、この命令を受け入れたのである。そして、甚五郎はどのように甘利を殺したのか、その暗殺の場面を考察してみよう。

望月の夜である。甲斐の武田勝頼が甘利四郎三郎を城番に籠めた遠江國榛原郡小山の城で、月見の宴が催されてゐる。大兵肥満万の甘利は大盃を續けざまに干して、若侍共にさまざまの藝をさせてゐる。

「三河の水の勢も小山が堰けばつい折れる。凄まじいのは音ばかり。」

こんな歌を歌つて一座はとよめく。そのうち夜が更けたので、甘利は大勢に暇を遣つて、跡には新參の若衆一人を留めて置いた。

「ああ。騒がしい奴等であつたぞ。月の面白さはこれからぢや。又笛でも吹いて聞せい。」かう云つて、甘利は若衆の膝を枕にして横になつた。(P.515)

以上の文によれば、甚五郎と甘利とは良い関係をもっているように見える。甚五郎は自身の美色と才能を手段として、短時間で甘利の歓心を得られることが推測できた。最後に、甚五郎は甘利を殺した場面は、次の文の通りである。

若衆は笛を吹く。いつも不意に所望せられるので、身を放さずに持つてゐる笛である。夜は次第に更けて行く。燃え下がった蠟燭の長く延びた心が、上の端は白くなり、その下は朱色になつて、氷柱のやうに垂れた蠟が下には堆く盛り上がつてゐる。澄み切つた月が、暗く濁つた燭の火に打ち勝つて、座敷は一面に青み掛かつた光を浴びてゐる。どこか近くで鳴く蟋蟀の聲が、笛の音に交つて聞える。甘利は臉が重くなつた。

忽ち笛の音がと切れた。「申し。お寒うはござりませぬか。」笛を置いた若衆の左の手が、仰向になつてゐる甘利の左の胸を軽く押へた。丁度淺葱色の袷に紋の染め抜いてある邊である。

甘利は夢現の境に、寛いだ襟を直してくれるのだなと思つた。それと同時に氷のやうに冷たい物が、たつた今平手が障つたと思ふ處

から、胸の底深く染み込んだ。何とも知れぬ温い物が逆に胸から咽へ升った。甘利は氣が遠くなつた。(PP.515-516)

以上の引用文を見れば、甚五郎は穏やかな態度で、甘利を殺したことが分かった。そして、甚五郎が甘利を殺す前の冷徹さと甘利を殺すときの心遣いには、人間としての冷酷な感情が見られるのである。ここでは、自分の命を救うために、主命を果たそうとする冷血な武士像だけが見られるのである。

3.3 主命を果たした甚五郎

その後、甚五郎は、「三河勢の手に餘つた甘利を容易く討ち果して、髻をしるしに切り取つた甚五郎は、鼯鼠のように身軽に、小山の城を脱けて出て、従兄源太夫が濱松の邸に歸つた」(P.516)と快い心情で、家康の助命の交換条件を果たしたのである。家康は約束の通りに、甚五郎を召し出した。だが家康は甚五郎を「目見えの時一言も甘利の事を言はなんだ」(P.516)と冷淡な態度でもって対応したのである。それから、甚五郎は戦役で功績を立ち、知行も増えたが、家康からのご賞美はまったくなかったのである。ある日、甚五郎は家康が「あれは手放しては使ひたう無い。此頃身方に附いた甲州方の者に聞けば、甘利はあれを我子のやうに可哀がつてをつたげな。それにむごい奴が寐首を搔きをつた」(PP.516-517)という自分にたいする批判を聞いたのである。甚五郎の反応は次の通りである。

甚五郎は此詞を聞いて、ふんと鼻から息を漏らして軽く頷いた。そしてつと座を起つて退出したが、兼て同居してゐた源太夫の邸へも立ち寄らずに、それ切り行方が知れなくなつた。源太夫が家内の者の話に、甚五郎は不斷小判百兩を入れた胴巻を肌に着けてゐたさうである。(P.518)

以上の文のように、甚五郎は家康の批判を聞いた後、反抗心から家康のもとを逃げ去つたのである。「ふんと鼻から息を漏らして軽く頷いた」(P.518)という表現から見ると、「誓言を反古にする犬侍奴」(P.514)とは蜂谷が約束を守らなかつたときの憤慨と同じ気持ちであり、軽蔑的な意味が読みとられるのである。さらに、「不斷小判百兩を入れた胴巻を肌に着けてゐた」(P.518)のような行為から見れば、蜂谷事件を経て、世俗

の経験を積んだ甚五郎はすでに無知な美少年だけではなく、いつでも冷静で無言の態度で姿を隠すつもりであった。要するに、甚五郎はいつの間に、主君の警戒心を察知し、「不斷小判百兩」(P.518)を用意したのである。そして、甚五郎はこのように決心したときから、主君に対する忠誠心も捨てた。甚五郎の行為について、清田文武は「陽に服し陰に反抗するといった傾きもある」⁴と指摘した。確かに、甚五郎の行為にこの様相が見られる。だが、甚五郎はこのような行動を取るのが、自己の生命を保護しようとしたからである。甚五郎は蜂谷を殺した後、個人の生命を重視し始めた一方、家康が自分に対して冷たい態度を察知し、家康の評判を聞いた次第、逃亡することをしたのである。

3.4 無言の復讐

逃亡していた甚五郎は 24 年目に朝鮮の使者となり、以前の主君の家康と面会したのである。面会する際に、何もせずに家康の目の前に無言に座っているだけである。作中には、甚五郎が家康に面会するときの心情に触れていなかったのため、そこで、山崎国紀が論述したことを見てみる。下記の通りである。

もし、家康が甚五郎に気づいていたことを甚五郎が察知し得ていたならば、甚五郎の<復讐>はまず成功したことになる。そして小説としてもその方が心理的にもとより深まろう。

そのとき、甚五郎は、家康の内面に、かつて自分に反抗して出奔という掟を破った甚五郎を目前にして、全く手も出せない屈辱と憤怒の炎を燃やしていることを実感していたに違いない。そして、家康が「むごい奴」と吐き捨てるように言った甚五郎への侮蔑、それから受けた怒りと屈辱は、この一瞬にして癒されることなる。

家康にしてみれば甚五郎の心理が確実に反照してくるだけに屈辱は一層激しいものとなる。そして、この両者の葛藤は、読み手の内面で花火を散らすことになる⁵。

引用文によると、山崎国紀は甚五郎が 24 年後に再会することで、家康に復讐したのである。山崎国紀の論述には賛成する。今まで考察した

⁴清田文武 (1970)「鷗外の歴史小説における人間像の形成—「待つ」「耐える」という契機を中心に—」『文藝研究』第 64 集 日本文芸研究会 P.21

⁵山崎国紀 (1989)『森鷗外—基層の論究』八木書店 P.282

結果をまとめてみると、最初に甚五郎は主命を果たせるようと奉公してきたが、しかし甚五郎は家康が自分を批判した際に、反抗心が芽生え、ついに逐電したのである。そして、「ふんと鼻から息を漏らして軽く頷いた」(P.518)という反応から見れば、甚五郎は自信を持ち、やはり思った通り様子と考えられるのである。そして、甚五郎は自分の才能を利用し、知遇を得る主君に出会い、朝鮮の使者になれたことが推測できる。山崎一穎は、甚五郎の反応について、次のように述べている。

石川数正に対する家康の言葉を聞いた時、家康とは神君と崇められているが、たかだかそれだけの器量の人物かと家康を見切った証が「ふん」である。そして、日頃家康から疎んぜられて来た折々に抱いた思いが的中した故に、「頷いた」のである⁶。

このように、石川数正に対する家康の言葉を聞いた甚五郎は、家康にただこのような器量の人だという軽蔑な考えが浮かんだのである。山崎一穎の論述に賛成する。甚五郎は才能があり、自信を持つ武士であったから、主君の真の面目を発見した後、主君のことに対する軽蔑な気持ちが生じたに従って、この主君の側から離れていく決意をしたのである。つまり、甚五郎にとって、家康を尊敬する価値がなくなったといえよう。甚五郎が家康に対する態度から見れば、甚五郎は独善的、傲慢な性格も持つ武士だといえよう。そして、甚五郎の人物像について、山崎国紀は次のように指摘している。

佐橋甚五郎の関連資料である「三河後風土記」では、甚五郎のことを「佐橋は天性欲心が深く、傍輩の『金ノ舒付』の大小を盗んで岡崎を逐電」と書いている。この「三河後風土記」では、尾形氏が言うように「欲心のためには手段を選ばぬ破廉恥漢」のように記述されているし、「改正三河後風土記」では、甚五郎のことを「不仁なるもの」として記述している。

鷗外が、この<破廉恥漢>たる悪のイメージを払拭して、甚五郎なる人物に最大級の評価を与えていることに注目しなければならな

⁶山崎一穎(2003)『森鷗外・歴史文学研究』教文堂 P.135(初出:『佐橋甚五郎』攷)『跡見学園女子大学 国文学科』第12号(伊藤嘉夫先生退任記念特輯)跡見学園女子大学国文学科)

い⁷。

このように、山崎国紀は鷗外が佐橋甚五郎という人物像を作る際に、「破廉恥漢」という悪いイメージを払拭し、最大級の評価を与えていることに注目しなければならないと論じた。山崎国紀の論述には賛成するが、しかし、「破廉恥漢」という言葉を使わなくても、甚五郎の所作から見れば、「破廉恥漢」というイメージも読み取れるのである。甚五郎は武士として、誓言を守るという信条を堅持したが、ただ自分の気に入ったものを手に入れたいために、同僚を殺したことで自分の命を救うために、甘利を殺したことから見れば、廉恥心がない所作ではないか。従って、甚五郎は才色兼備の武士であっても、人間としてあるべき廉恥心を持っていない人間だといえよう。

ここまで、甚五郎の臣下像を考察し、甚五郎は自分の命を守るために、家康の助命条件を受け取り、甘利を殺した。甚五郎の殺人手段は、甘利の臣下になり、甘利の信頼と愛護を取った上で、甘利を殺したのである。この行為から見れば、甚五郎は個人の利益を守るために、人と人の感情を配慮せず、冷血な性格を持つ武士であるといえよう。主命を果たした甚五郎は家康に裏切られたことで、独善な性格になり、本来の忠誠心を捨てて、ついに逃亡した。そして、この独善な性格がついに復讐の念に変わり、朝鮮の使者となって、無言のままに、家康の目の前に出現したのである。つまり、甚五郎は家康の影響を受けてから、意地が強くなり、身分の拘束されない外国の使者となったのである。

⁷山崎国紀（1989）『森鷗外—基層の論究』八木書店 P.268

第四節 おわりに

最初に、主君徳川家康は、主人公佐橋甚五郎の助命をし、お互いに配慮するような君臣関係が築かれた。しかし家康の猜忌心により、本来のお互いに配慮する君臣関係が崩れ、甚五郎との君臣関係がお互いに警戒する関係になってしまう。それで、甚五郎が復讐の念をもって逃亡し、朝鮮の使者となり、無言のままに、家康の目の前に再び出現した。このように、家康と甚五郎は武士の行為に対する共同の意識を持たず、信頼関係も築いていないうちに、表裏のある君臣関係が成り立ったのである。家康と甚五郎の支配関係は、図5のように整理することができる。

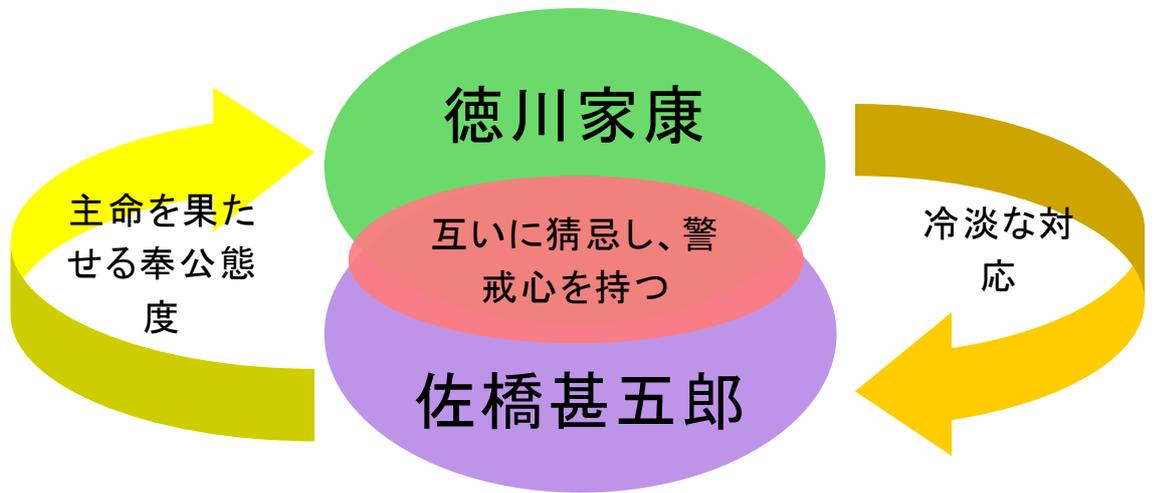
主君家康と臣下甚五郎における支配関係の考察を通して、家康は才能があり、独善な性格を持つ甚五郎に対する信頼感がなく、警戒心を抱き主君像が見られる。甚五郎は主君に対する信頼感も欠け、自己の生命を保護する武士だと見られる。つまり、家康と甚五郎の間に、殺人手段に対する共同な意識を持たないので、互いの信頼関係がしっかりと構成する前に疑いが始めたのである。

要するに、甚五郎は武士としての道徳意識が持っているが、忠誠心を持つかどうかは状況によって、対応も違ってくる。つまり、甚五郎は個人の主張があり、意地が強い武士だといえる。家康は高い道徳基準をもって臣下に評価を与える主君だと見られるのである。

図5 「佐橋甚五郎」—徳川家康と佐橋甚五郎

因

表裏が
ある君
臣関係



果

互いに
防衛する



高い道德標準で臣下に評価する主君

意地が強い
武士